

目次

凡例

口絵

題字 有賀喜左衛門

進歩と教育

第一 自己發奮 5

年頭所感 5

活動の福音 10

主行主義管見 16

研究力に就て 18

女子の賢愚 20

人の體格 22

第二 社會開拓

生活の制度	24
仕事の秩序	26
遊戯と學問	28
利用すべき夏季休暇	31
印象と發表	33
死の問題	35
社會の進歩	41
時代の精神	46
體育の奨勵	49
文藝の力	52
今の婦徳	53
米人の長所	55
食物と文明	58
大學擴張	60
女性の愛	68

第三 教育所見 71

余がとれる教育の主義方針 71

自然と教育 76

職業教育と女子高等教育 86

児童教育と幼稚寮 91

児童と手工教育 98

女子高等教育に就て 102

ペスタロツチ先生 106

第四 國民一般 126

奉祝天長佳節 126

今日の日本 130

國力の涵養 132

愛國心と博愛心 137

家庭と自然 139

婦人の地位 143

吾人の使命 153

女子教育

紀元節……………160

緒言……………169

第一章 近世女子教育の思想……………169

第二章 歐米文明の影響……………176

第三章 新學制頒布後の状態……………178

第一 貴族社會の教育……………178

第二 一般女子の小學・中學教育……………180

第三 職業教育……………184

第四 女子の高等教育……………187

第五 女子教育の理想……………190

女子の教育

第一章	緒言	195
第二章	嬰兒時代	198
	第一節 身體の發育	198
	第二節 精神の訓育	202
第三章	幼兒時代	205
	第一節 身體の發育	205
	第二節 精神の訓育	206
第四章	初等教育時代	210
	第一節 身心發育の狀態	210
	第二節 科學的教育	213
	第三節 國家的經濟的教育	214
	第四節 道德的教育	215

第五章 中等教育時代…………… 217

第一節 教室外教育の必要…………… 217

第二節 科學的教育…………… 220

第三節 國家的經濟的教育…………… 223

第四節 道德的教育…………… 226

第六章 高等教育時代…………… 229

第一節 高等教育に對する反對說…………… 229

第二節 高等教育の必要…………… 232

第三節 普通大學教育…………… 234

第四節 科學的教育…………… 237

第五節 國家的經濟的教育…………… 238

第六節 道德的教育…………… 239

第七節 專門大學教育…………… 241

第七章 卒業後の生活…………… 243

第一節 教育を受けたる女子の覺悟…………… 243

第二節 研究的生活	244
第三節 經濟的生活	247
第四節 道德的精神的生活	249
第八章 結論	252
創設期（明治三十四年～同三十五年）	
日本女子大學校開校の辭	257
歐米女子大學の形勢	263
開校二ヶ月を迎へて	267
倫理學とは如何なるものか	269
吾人の理想	270
理想、目的、希望	272
教授法及び試験の方法	274
原動力とは如何なるものか及び之を得る方法は如何にすべきか	275
選擇と改心	277
吾人今日の責任	281
注意力の集注	286

品格養成	288
修徳の方法	290
判断に就きて	298
杖を捨てよ、自ら歩め	301
天職、本務	303
時に就きて	305
大器晩成	311
何故に諸子の直ちに着手すべき事の遅延するか	317
其の時の機會を其の時に得よ	318
予は諸子に對して二つの希望を有せり	321
女子と教育	326
女子教育雜感	327
偉大なる國民たれ	328
卒業生に告ぐ	331
明治三十六年度	
時弊を論じて女生諸子に告ぐ	339
進歩主義女子教育の一端	345

婦女新聞の三週年を祝す……………350

日本女子大學校の二百十日……………351

教育上の時弊……………361

分厘の不足……………365

第一回卒業生に告ぐ……………374

明治三十七年度

訣別の辭……………383

研究科生の爲に……………384

研究科につきて……………394

家庭週報發刊につきて……………396

戦時に於ける婦人の責務……………398

研究を以て本務とせよ……………400

經濟的品性の必要……………402

暑中休暇に先ち別れを告ぐ……………404

我國の教育に於ける一大缺點……………406

新人生觀……………409

米國の教育英國を醒まさんとす……………416

誰れか賢婦に會ひしか……………426

女子大學生の眞價……………428

喜ぶべき多忙……………430

第二維新を論じて我國教育の宿弊に及ぶ……………431

實業社會的教育……………438

個人性と社會性……………448

日本女子大學校設立披露式に於て……………457

この幼童……………467

我等が捧ぐべき月桂冠……………471

談片……………479

我校の教育方針に就て……………481

第二回卒業生に別れを告げ、併せて本校の略歴現状の報告を述ぶ……………487

明治三十八年度

人は何故に社會的ならざる可らざるか……………495

研究的體育の必要……………509

戦捷祝賀式上に於て……………512

運動會雜言……………514

家庭週報一週年を迎へて……………	515
女子の高等教育に就て……………	517
歸郷のいへづと……………	522
自然と教育……………	524
家庭の意義……………	532
家庭の成立に就て……………	536
人類生活の三制度……………	563
研究に就て……………	564
櫻楓館開館式の辭……………	566
平和の勇士を作れ……………	571
今年の運動會……………	574
時勢を見て各自その任務をつくせ……………	575
自ら直接社會に立つて働かんより斯かる人物を養成すべき根本につくせ……………	579
宇宙を支配せる力を認め無限の進歩をなせ……………	584
社會教育と其の適例……………	589
日本女子大學校の教育方針に就て……………	592
芽出度明治三十九年……………	598
ペスタロツヂ先生を懷ふ……………	600

ペスタロッチ先生小傳……………

602

完全なる食物……………

613

幼稚寮設立に就いて……………

615

精神的生命……………

621

櫻楓會の現實……………

645

第三回卒業式告辭……………

650

明治三十九年度

豊明幼稚園・小學校開校式並びに本校第五回記念式に於て……………

659

理想の實現に就いて……………

668

文華の根元……………

670

女子高等教育に對する意見（其の一）……………

674

文藝に對する本校の主義……………

680

此の休み……………

682

山間の夏期寮より……………

683

三泉寮の開寮兼閉寮式に於て……………

685

頃日見る婦人の特性……………

689

最近の福音……………

690

天與の健康に還れ……………696

自愛と他愛及び愛國心と博愛心……………698

愛國心と博愛心……………703

本文藝會の結論……………706

兒童教化の原動力……………710

新年の希望……………711

從順の意義……………717

日本女子大學校第二期擴張發表式上に於て……………719

祝紀元節……………728

趣味教育の價值……………734

第四回卒業式告辭……………737

印象と發表……………741

明治四十年度

今年度の方針に就いて……………779

國力の荒廢を如何にかすべき……………781

女子高等教育に對する意見(其の二)……………786

夏期學校……………791

婦人と農藝.....794

發展の原動力を何處に求むべき乎.....799

收穫の秋.....808

祝天長節.....811

世界漫遊の結論.....814

善學善遊.....818

主行主義に就いて.....820

時代の精神を讀め.....847

我が國の豫言.....850

真相如何.....855

第五回卒業式告辭.....857

明治四十一年度

第七回創立記念式式辭(大要).....865

女子の高等教育は下女頭を作る丈でない.....867

結婚の用意.....868

各部の使命.....870

大學擴張.....897

女子大學講義紹介の辭	907
櫻楓館記念日に於ける感想	909
捧げられたる生涯	913
生命の歸趨	916
家を城廓として一步も社會に交らぬ婦人が多い	921
天長の佳節に際して戊申の詔勅の御趣意を仰ぐ	922
如何にして確信の基礎を築くべきか	927
今後五十年の大勢如何	932
効果多き思考法	937
婦人の境遇を斯くして開拓すべし	948
大學擴張と女子大學講義	953
我が國家第二次の發展を何によりて遂げんとするか	955
明治四十二年度	
第八回創立記念式式辭(大要)	963
婦人今後の發達は此の原理を實行するにあり	963
婦人と國民	970
奮闘の興味	973

「家庭週報」と「家庭」との合併の理由……………975

大學擴張實現に就いての相談……………977

我と云ふものゝ研究……………1003

故伊藤公爵を悼み其の生涯を懷ふ……………1014

婦人の進歩に最も影響する二大原因……………1021

年末に際し會員に送る書……………1030

新年に於てよき氣分を作れ……………1032

隠れたる我の研究……………1034

將來女子の爲すべき仕事と學ぶべき事柄……………1041

櫻楓會來年度の方針に就いて……………1043

眞の美人とは何ぞ……………1048

明治四十二年度

悲喜交々至れる感想……………1055

我が教育界を襲ひたる大反動と女子教育の前途……………1058

女子教育の過去及將來……………1062

結婚の賀筵にて聞きたる無聲の聲……………1065

精神修養上に受ける夏季の恩恵……………1067

夏期講習會に於て學ばれたる教訓	1068
北越に於ける女子教育獎勵の巡回講演	1071
國運の發展と女子教育	1076
國民教育と實業家	1082
會員諸子の通信に答ふ	1086
新年を迎ふる心の用意	1091
明治四十四年度	
婦人の人格と修養の態度	1101
頃日巡回中に予が最も愉快に感したる一事	1102
婦人の婦人觀を俟つ	1103
多事なる今日	1106
危険なる情熱の血	1109
我が先輩の意志ある所を聞け	1112
新年を迎ふるの辭	1115
我國女子の將來	1122
年頭所感	1124

書簡

(一) 万寿枝夫人宛	(一通)	1129
(二) 麻生(白木)正藏宛	(二十九通)	1132
(三) 土倉庄三郎宛	(一通)	1143
(四) 玉木直子宛	(十四通)	1143
(五) 堂本松枝宛	(一通)	1148
(六) 井上雅二宛	(一通)	1148
(七) 井上秀宛	(一通)	1149
(八) 佐々榮子宛	(一通)	1149
(九) 富山貞子宛	(四通)	1149
(十) 上代たの宛	(一通)	1151

英文論文

PRESIDENT NARUSE'S SPEECH	1190
THE ATTITUDE OF SELF-CULTURE	1183
THE COMING WORLD	1178
THE UNFOLDMENT OF GENIUS	1172

解	
說	
THE BALANCE OF POWER BETWEEN THE EAST AND THE WEST.....	1164
THE RHYTHM OF LIFE.....	1157
	1193

凡例

一 本成瀬仁蔵著作集は、公刊された著書・雑誌論文・講演記録及び日記・書簡等の著作を時代順に収録し、これを全三巻とした。

一 第一巻は明治十一年から三十三年まで、第二巻は同三十四年から四十四年まで、第三巻は同四十五年から大正八年までの著作を収録し、同時に資料の所在・出版社・掲載誌などを表示した。各巻には解説を付し、さらに第一巻には略年譜を、第三巻には参考文献及び索引を付す予定である。

一 表記に関しては出来得る限り原文の尊重につとめ、用字、おくり仮名などもそのままとした。用字の中、丁(事) 卍(共)キ(時) ヲ(して)などは、現在通常使用のものとし、変体仮名も現行のものに改めた。また、明らかな誤字・誤植・脱字・衍字などはこれを改めた。なお、著作によって活字が異なる場合は、出来る限り統一した。

一 漢字すべてにルビのある原文は、特に必要と考えられる場合のほか、他は削除した。

一 外国人名・地名などの表記もすべて原文にしたがったが、わかりにくいものには適宜()で注記した。

一 句読点は原文どおりとした。全くそれのないものには文意を明確にするため必要な限り付した。

- 一 傍線・傍点のある個所は原文どおりとしたが、。◦◦◦△などの圈点はすべて傍点（、）に統一した。
- 一 英文は明らかな誤記・誤植はこれを改めた。その他不明確な個所は⑧⑨又は（ ）で注記した。
- 一 編集者註は（ ）で示した。

